

●会場：臨江閣別館1階洋間 前橋市大手町3丁目15番

●会期：2021年11月30日(火)～12月12日(日)

●時間：9:00～17:00(入館は16:30まで)／●休館日：月曜日／●入館無料

新出土文化財展 2021

— 令和2年度発掘調査成果 —

●印刷・発行 平成3年11月26日



令和2年度も市内各所で、公共事業、民間開発事業などに伴い、発掘調査を実施しました。

縄文時代から中・近世に至る様々な時代の遺構や遺物が新たに発見されました。

これらの貴重な発掘調査成果を広く市民の皆様にご覧いただくため、「新出土文化財展 2021」を開催いたします。

初冬のひと時、古代に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

【お問い合わせ先】

前橋市教育委員会事務局文化財保護課

前橋市総社町三丁目11番地4

電話 027-280-6511



【前橋城大手門】

本町一丁目の工事現場で、酒井氏時代の前橋城大手門の石垣が初めて発見された。石垣は市指定史跡となっている車橋門(くるまばしもん)よりも大きく、精緻に加工され、すき間なく積まれていた。

こちらのQRコードから前橋城大手門の紹介動画(約5分)をご覧いただけます。Wi-Fi環境等がある場所でお楽しみください。



姿を現した大手門の石垣

【朝倉上廊遺跡(あさくらかみくるわいせき)】

古墳時代後期末から奈良・平安時代の竪穴建物跡45軒、溝跡14条のほか土坑、ピット、井戸跡などを検出した。

特筆すべき遺構としては、奈良時代の水田開発に伴う灌漑用水路と想定される3号溝跡が挙げられ、西端のコーナー部から8世紀中葉の壺・甕(つき・かめ)が集中して出土した。



3号溝跡の遺物出土状況

【上泉下中峯遺跡(かみいはずみしもなかみねいせき)】

古墳時代後期末から奈良・平安時代にかけての竪穴建物跡23軒、掘立柱建物跡10棟、円形有段遺構1基などを検出した。

特筆すべき遺構としては、直径・深さ約3mの巨大な円形有段土坑が検出されており、「冰室」の可能性が指摘されている。この土坑からは、須恵器長頸壺、短頸壺、甕などの貯蔵具のほかに、「厨(くりや)」と墨書された8世紀中頃の須恵器壺が出土した。



冰室の可能性がある円形有段土坑

【荻窪倉兼三遺跡(おぎくぼくらかねさんいせき)】

古墳時代後期末から平安時代の竪穴建物跡26軒、掘立柱建物跡7棟、柵列跡6条などを検出した。

特筆すべき遺構・遺物として、7世紀末から8世紀中葉と考えられる柵列に囲まれた大型竪穴建物跡や掘立柱建物跡と、その大型竪穴建物跡から出土した墨書に用いる水滴と考えられる須恵器平瓶(ひらべ)、仏像か鏡の一部と考えられる銅製品、「大」の墨書がある土師器が挙げられる。「大」の墨書は人名の一部の可能性がある。また、銅製品は仏教への篤い信仰心を、須恵器平瓶は日常的な文字の使用を示している。



須恵器平瓶出土状況

【元総社蒼海遺跡群(もとそうじやおうみいせきぐん)】

元総社蒼海遺跡群は、榛名山麓の標高125～110mの前橋台地西部に位置し、その範囲は東西1,000m、南北800mで牛池川と染谷川に挟まれた微高地上にある。本遺跡群が位置する元総社町、総社町周辺は、古墳時代後期から終末までの上野(こうづけ)地域と中央政権との関連をうかがわせる総社古墳群・山王廃寺、律令期になると上野国府(こうづけこくふ)・国分僧寺(こくぶんそうじ)・国分尼寺(こくぶんにじ)が建立され上野国(こうづけのくに)の中心的な地域となっている。令和2年度は、元総社蒼海遺跡群(140)、(141)、(144)、(145)、(75街区)No.2の計5遺跡で発掘調査を実施した。

蒼海(141)A区では、牛池川の渡河地点に向かって下る、切通し状の路体を備えた推定上野国府域を南北に縦断する古代道路状遺構を検出した。



道路状遺構

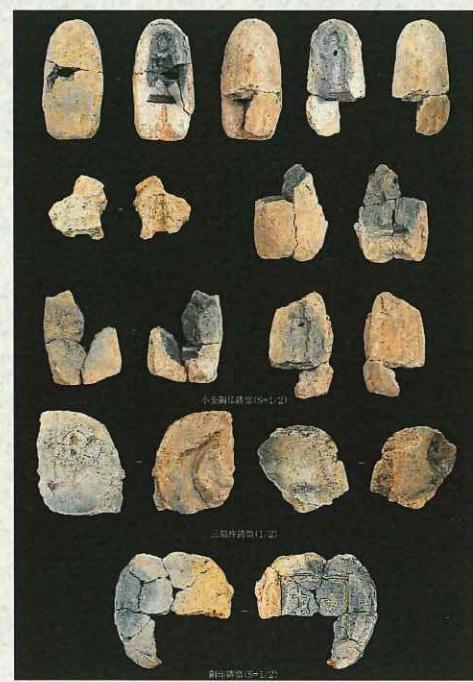


蒼海(145)では、台座を含めた高さ10cm、重さ約145gの11世紀前半頃の作成と推定される小金銅仏が出土した。出土状態から、何らかの行為(地鎮等)に対して安置(埋納)された可能性が考えられる。



蒼海(145) 調査区西側

蒼海(75街区)No.2では、10世紀初頭のものと考えられる工房跡から、小金銅仏・三鈷杵(さんこしょ)・銅印の鋳型・須恵器転用取瓶(とりべ)・埴堀(るつぼ)などが出土した。



鋳型(小金銅仏、三鈷杵、銅印の表・裏)

【推定上野国府跡(すいていこうづけこくふあと)】

礎石建物跡と考えられる堀込地業（ほりこみじぎょう：地下を掘り下げて土を入れて突き固めたもの）が検出された。

また、礎石建物が廃絶した後、溝状に掘られたくぼみから大量の土器が出土した。これらの土器は有力者の宴席で使われたものと考えられ、現代の紙皿などのように、一度使っただけで捨てられたものと考えられる。



礎石建物跡(白線で囲まれた部分が建物の基礎)

【総社二子山古墳（国史跡）・愛宕山古墳】

総社二子山古墳（国史跡）では、堀の規模の確認調査を行ったところ、現地表面から約1mの深い堀が墳丘周囲を巡っており、前方部西側では堀幅が2.2m以上に及ぶことが確認された。

愛宕山古墳は、これまで二段築成（ちくせい）の古墳と考えられてきたが、今回の調査により少なくとも三段築成であったことが明らかになった。また、墳丘斜面には、二重に葺石（ふきいし）を施した特異な構造を持っていたことが明らかになり、墳丘のテラス面にも石が敷かれていたことが確認された。

こちらのQRコードから愛宕山古墳の現地説明会の動画（約5分）をご覧いただけます。Wi-Fi環境等がある場所でお楽しみください。



内堀を挟んで墳丘を望む（総社二子山古墳）

【上細井中西部遺跡群No.3】

奈良・平安時代の竪穴建物跡などの遺構が検出された。中には、金床石（かなどこいし）や鉄を精錬する際に出てくる不純物の塊である鉄滓（てっさい）が出土する竪穴建物跡も見つかっており、鍛冶に関する仕事を行っていたものと考えられる。

特徴的な出土遺物として、墨書土器、刻書土器、刻書紡錘車といった文字資料がある。また、官衙（かんが）関連遺物である平瓶（ひらべ）や鉈尾（だび）なども出土している。これらの遺物から、この集落には識字層が存在していたことがうかがえる。



C工区1-1区調査区全景



牛の墨書のある土器